

最近の南・北アメリカ比較史研究

宮 野 啓 二*

Recent Studies in Comparative History of North and South America

Keiji Miyano*

It is well known that there are sharp differences in economic, political and cultural fields between North (Anglo) America and South (Latin) America. I have investigated the historical roots of these differences in my previous papers. In this paper, I will review five recently published books concerned with the comparative studies on North and South American history.

The first book, M. Zavala's "Hispanoamérica-Angloamérica, causas y factores de su diferente evolución", elucidates the differences between English and Spanish colonies in the New World. The second book is Meinig's "The Shaping of America: Atlantic America". He compares "Protestant Commercial America", with "Catholic Imperial America" in the new historical framework of "Atlantic World" which links together Europeans, Native Americans and Africans in the New World.

In the third book, Batista investigates the historical background of the cultural differences between Anglo and Latin America ("Latinoamericanos y norteamericanos, cinco siglos de dos culturas").

In the fourth book, "Development and Underdevelopment in America", Bernecker et al. pay special attention to the analysis of the historical process which has produced the gap in economic development between the two Americas.

The fifth book, Dealy's "The Latin Americans: Spirit and Ethos", analyzes the differences between the Northamericans and Latinamericans, contrasting the "private man" culture of the United States with the "public man" culture (or Caudillaje culture) of Latin America.

Key Words (キーワード)

Types of Colonies in the New World (植民地類型), American Indians (アメリカ先住民), Catholicism and Protestantism (カトリック教とプロテスタント教), New Atlantic World (新大西洋世界), Frontier (フロンティア)

I 序 論

周知のように、リオ・グランデを境とする南・北アメリカは、同一のアメリカ大陸に位置しながら、政治、経済、文化などあらゆる面で対照的な

地域となっている。北アメリカ（又はアングロ・アメリカ）は、今日世界の最先進国（高度に発達した資本主義国）であるアメリカ合衆国に代表される地域であるのに対し、中・南米（ラテン・アメリカ）は、発展途上国から成る地域で、政治的

*呉大学社会情報学部 (Faculty of Social Information Science, Kure University)

にも経済的にも、北アメリカより遥かに遅れた「第三世界」の一部を構成している。コロンブスにより「発見」されたアメリカ大陸に何故こうした発展段階の異なる二つの地域が生まれたのであろうか。この巨大な疑問に答えるためには、様々な角度から研究が進められなければならないことは言うまでもない。

筆者は、前論文でこの問題に迫るため、南・北アメリカを比較史的視点から分析した諸研究（A・スミス、ヘーゲル、ウェーバー、マリアテギ、ジェノヴィーズなど）を研究史的に整理し、その論点を解明してきた¹⁾。本稿は、そうした問題点をふまえて、比較的最近に発表された著作をとりあげ、その研究動向と問題点を追求することにする。したがって、本稿は前論文を補充するものであることを付け加えておきたい。

Ⅱ 南・北アメリカの比較史

(1) マサ・サバーラの英・西植民地の比較論

マサ・サバーラは、『イスパノ・アメリカとアングロ・アメリカーその異なった進化の諸原因』（1992年）において、南・北アメリカの発展の相違の原因を比較史的に考察している。まず彼は、「二つの主要な植民体制」であるイギリスとスペインの植民を対比して、次のように述べている。

イギリスの植民は「本質的に経済的事業」(empresa esencialmente económica)であるのに対し、スペインの植民は『征服と宗教的・文化的拡大の事業』(empresa de conquista y extensión religiosa y cultural)であると¹⁾。

すなわち、イギリスの植民は、本国におけるよりもより良い生活を希求する人々により、「私的利益」のために行われた。(定住地の建設)この植民を実行した特許植民会社は、営利企業として設立され、植民地における封建制の再建や新貴族の創出を目的とするものではなかった²⁾。

これに対し、スペイン人の植民は、先住民＝インディオとの戦争による征服事業として行われ、征服者はその土地への定住ではなく、「名誉と報

酬を伴う^{セニョール}領主」]、すなわち封建領主たらしめる人々であった。また植民は、本質的に宗教的・文化的事業としても行われ、先住民やアフリカ人の隷従的・奴隷的労働の搾取をめざして実行された³⁾。

次にイギリス植民地の建設とその特色を見よう。

イギリス植民地は、何よりも定住植民地(colonias de poblamiento)として建設された⁴⁾。移民は、植民者(colono)として経済的地位の向上を目的としてやって来た人々であった。彼らは、イギリス社会の生活や思想を移植した。その思想は、物質的成功を求める「経験主義的、プラグマティックな伝統」であり、自然を支配し、富を享受しようとするものであった⁵⁾。北米では、貴金属の代わりに良好な土地とある程度の経済的自由をもっていたことが、その後の急速な発展を可能にしたと、マサ・サバーラは述べている⁶⁾。

他方、イギリス植民地は、「宗教思想の最も特徴的な実践場」でもあった。そこでは、聖書が「精神的シンボル」となり、良心や自由を基礎としての物質的繁栄を追求するモラル(カルヴィニズム)が定着した⁷⁾。宗教的自由を求めた移民が多かったニューイングランドを中心として広がったピューリタニズムは、労働、商業、産業の経済的自由の恵みをたたえ、個人的致富の手段を正当化する私的モラルを確立し、資本主義とブルジョワジーの成長の基礎をつくった⁸⁾。こうして、プロテスタンティズム、宗教改革の哲学、異教徒への布教の断念が、アングロ・アメリカの歴史に深い足跡を残すこととなった⁹⁾。

イギリス植民地では、イギリス人の人種観(人種的純粋)が、先住民(インディアン)やニグロの排除となって現れた。インディアンは、イギリス人の植民地生活から排除され、「よそ者や敵」として取り扱われた。西部の征服は、「赤い皮膚」を無慈悲に排除しつつ進められ、インディアンの絶滅の方向をとった。イギリス植民地では、西欧文明(アングロ・サクソン)の優越思想が強く、人種憎悪や人種軽蔑が広くみられ、スペイン植民地のような人種混血は進まなかった¹⁰⁾。

これに対し、スペイン植民地の特徴はどうか。

アメリカ大陸の「征服」の主役となったのは、王権と宗教が緊密に結合し、国土回復運動を指導したカステリア王国であった¹¹⁾。「征服」は、国王との協約の下で冒険心と貪欲で知られた征服者の私的イニシアティブにより実行された。そして征服にスペイン植民都市が次々に建設された。このスペイン植民都市は、①先住民の反乱に対する防御施設、②征服者と植民者の生活の安定した居住地、③行政的・宗教的センター、④交易の基地及び海賊や密輸の防止基地として設立された¹²⁾。

スペイン植民地の、初期の征服段階（16世紀）は先住民の奴隷化、強制労働、虐待や迫害、ひどい搾取が行われ、先住民人口の激減と彼らの物質的・精神的条件の悪化が生じた。しかし、植民段階（17世紀中頃から）になると、経済的、宗教的理由から先住民の保護が実施され、集住政策によるインディオ共同体の再編や混血と同化が進行し、減少した先住民人口の部分的回復がみられた¹³⁾。

スペイン植民地の経済にとり貴金属（特に銀）の産出が重要で、本国向け輸出の大半が銀輸出で占められていた。しかし、新大陸からの莫大な銀の輸入は、スペイン本国を「寄生的金利国家」（una rentista parasitaria）におち入らせることとなった。銀を中心とする植民地の経済的余剰（「植民地的余剰」）の搾取は、少数者への富の集中と宮廷・教会などの不生産的消費を増大をもたらしただけで、本国や植民地の生産力の発展に貢献しなかったからである¹⁴⁾。こうした事態は「アメリカ的現象」（fenómeno americano）と呼ばれた¹⁵⁾。

スペイン植民地では、人種間「混交」（meztizaje）が進み、様々な混血種（castas）が生まれたのみならず、文化や経済の面でも混合が行われた。ここでは、スペイン人、インディオ、アフリカ人の技術、習慣が混在すると同時に、それぞれの異種の生産様式が共存することとなった。（「異種の構造」estructura heterogénea）インディオ共同体と黒人奴隷制プランテーション、「資本主義的」^{オブラーベ}鉱山業、織物場などの生産様式の共存がみられた。

また労働様式では、奴隷制、農奴制、賃労働制などが並存していた¹⁶⁾。スペイン植民地の経済構造は、第一義的に輸出志向的であり、奴隷制及び農奴制の大土地所有ではモノカルチャーが、インディオ共同体と零細農ではポリカルチャー（多種栽培）が支配的となっていた¹⁷⁾。

スペイン植民地社会の階級は、人種別階層制で、次のように分けられる。^{ベニクスラレンス}①本国人（大・中商人、王室官僚、地主、小商人）、^{クリオージョス}②現地白人（奴隷主、エンコメンデーロ）、③一般白人（小商人、手工業者、下級役人、賃労働者）、④混血種（メステイソやムラートの商人、賃労働者）、⑤インディオ、⑥黒人奴隷。ここでは近代的階級（自由なプロレタリアートとブルジョワジー）の形成が遅れていた¹⁸⁾。

最後に、マサ・サバーラは、南・北アメリカの二つの植民地モデルの特徴を以下のように要約している¹⁹⁾。

スペイン植民地モデル

- ① 植民地間並びに植民地内でのコミュニケーション（交通・交易・通信）の欠如。
- ② 植民地間の不均等発展（人口多く相対的に豊かなメキシコ、領主制と鉱山業の発達したペルー、農産的輸出で栄えたベネズエラなど）。
- ③ カトリック教会の経済力の強さ。
- ④ 社会的特権と経済的地位を守る形態としての人種別階層制（castas）の存在。
- ⑤ 支配階級の封建領主的傾向。
- ⑥ 土地所有、商業、官僚の優位性と肉体労働への嫌悪。
- ⑦ 鉱山業、農業などの経済力の集中。
- ⑧ 経済的余剰の奢侈的浪費。
- ⑨ エンコミエンダ制の封建的性格。

イギリス植民地モデル

- ① 植民地の経済的交流と内部市場の形成。
- ② 植民地間の経済活動の多様性。
- ③ 人種別階層制や出自や血縁による特権がなく、個人的努力による地位の向上。
- ④ 職業による差別なく、家族経済は成員の労

働により維持さる。

- ⑤ 王室や教会の税の欠如。
- ⑥ 経済的余剰は、奢侈的消費でなく再生産に投資。
- ⑦ 先住民の隷属的労働は存在せず。(先住民の部分的絶滅はあったが)

以上が、イギリスとスペインの植民地のモデルの特徴であるが、両モデルに共通する点として、マサ・サバーラは、植民が私的資金により私的事業として実施されたこと、本国の重商主義政策の下に置かれたこと、先住民の部分的絶滅と黒人奴隷制が導入されたこと、輸出向農産物の生産が发展したことをあげている。そして両モデルの相違点としては、スペイン植民地で植民に先立ち、残忍な「征服」が行われ、人種、文化、生産様式の混合が生じたのに対し、イギリス植民地では、「征服」でなく領土の利用が先行し、教会が植民に参加せず、人種混交もなく人種別階層制も発生しなかった点をあげている²⁰⁾。

要するに、スペイン植民地では、鉱山業と輸出向農産物の生産(前資本主義的プランテーションやアシェンダ)が植民地経済の二つの基軸となった。スペイン領アメリカの植民地経済は、第一義的に輸出志向的であり、その周辺にインディオ共同体や小農民の自給的農業が存在していた²¹⁾。

(2) マイニツヒの「新大西洋世界」論

マイニツヒは、『大西洋アメリカ1492-1800-』(1986)において、アメリカ大陸におけるヨーロッパ諸国の植民地の形成について論じている。彼によれば、「ヨーロッパ人のアメリカ侵略」(European encroachment upon America)は三段階(局面)、すわなち、航海、征服、植民に分けられる¹⁾。そしてこの三段階は、更に次の諸段階に細分される。①探検、②採取、③交易(物々交換)、④掠奪、⑤交易基地の設立、⑥植民地支配機構の整備(官僚、宣教師、兵士)、⑦植民者の定住地、⑧帝国的植民地の成立²⁾。

ヨーロッパのアメリカ侵略は、「新大西洋世界」(a new Atlantic world)の成立をもたらした。

大西洋は、「西欧文明の地中海」となり、巨大なフロンティアが西に向かって開かれた。この「新大西洋世界」の出現は、単なるヨーロッパ人のアメリカ移住にとどまらず、新・旧大陸の諸民族の広大な相互交流の場所となった³⁾。それは、白人、インディアン、黒人など多様な民族の交流・結合を生み出したのである⁴⁾。

ところで、「新大西洋世界」の形成は、三つの植民地タイプを創出した。第一は、イギリス型で、先住民を排除し、白人と先住民を分離する堅固なフロンティアを創出した植民地である。第二は、カナダ型で、白人と先住民が交易地点で温和な接合を行い、各々が分離した地域をもちながら経済的に結合した植民地である。第三は、メキシコ型で、様々な度合で先住民との人種的・文化的混合、融合を行う単一の複合的社会を形成し、その中で階層分化が生じた植民地である。こうした植民地のタイプは、英・仏・西の異なった人種観によるものとされるが、むしろ異なった現地の諸事情、特に植民地政策の相違の方が重要であるとマイニツヒは述べている⁵⁾。

まずイギリス植民地についてマイニツヒの見解をみよう。

“Ireland was on the way to America” (A. L. Rowse)と言われたように、イギリスのアメリカ植民地建設は、アイルランドの植民地化の経験によるところ大であった⁶⁾。イギリスの植民地建設は、ヴァージニアのジェイムズタウンの設立より始まったが、それは「気狂いじみた富の探究」を目的とする営利的植民会社により行われた⁷⁾。しかし、マイニツヒは、ピルグリムによるプリマス植民地(ニューイングランド)をアメリカ植民地の出発点として重視している。

ニューイングランドは、ピューリタン(カルヴィニスト)により設立された植民地であるが、それは単なるイギリスの模倣ではなく、“a New Kind of England”の創設であった⁸⁾。(ニューイングランドの中核となったのは、マサチューセッツとコネチカットである。)このピューリタン植民地の特徴は、「キリスト教徒の、ユートピア的、

閉鎖的、共同体的」社会を形成した点にある。ニューイングランドの社会は、信仰で結ばれた同質的信徒により形成されたのである。ピューリタンは、比較的教育があり、仕事に熟練した職人、商人、農民から成り、核家族で来住し、牧師の指導下で生活した。彼らの植民の基本単位は、「タウン」(town)であった。タウンはイギリスの農村共同体のアメリカ版とも言えるが、その中味は大きく異なっていた。そこには、領主邸や小屋住み農は存在せず、階級や富の格差の少ない社会であった。しかし、この同質的タウンも、経済的發展につれ、その中の貧富の差が拡がり、「ピューリタンからヤンキーへの変化」が生じたが、「よりよい社会をつくるために、共に勤勉に働く道徳心の強い人々の団体」としてのタウンは、根強く持続していった。ニューイングランドの人々の大半は、こうした「ピューリタン植民者の子孫」なのである⁹⁾。

ヴァージニア植民地は、植民会社(ヴァージニア会社)により「商業的投機」目的のために設立された。ジェームズタウンは、ニューイングランドのタウンとは異なり、政庁や要塞、教会、倉庫などの集った小さな政治的センターにすぎなかった。当局は、ニューイングランドのようなタウンの設立を奨励したが、放漫な土地政策やタバコ・プランテーションの発展のため、「その名に値するタウンは一つもできなかった。」ヴァージニアには、「階層制的、商業的農村社会」が形成され、土地所有者＝プランターがエリートとして支配するようになった。また移民の多くも、家族単位ではない貧しい男性の年奉公人であった。ここでは、みるべき都市も町もなく、人々は分散したプランテーションに拡散していた。こうして、タバコを輸出作物とするチェサピーク地域は、大西洋貿易世界の重要部分となった¹⁰⁾。

ヴァージニアと同類型の植民地として、カリブ海のバルバドス島をあげることが出来る。同島は、1627年に投機的植民会社により植民され、初期のタバコ栽培から砂糖、綿花に特産物を変えながら、ヴァージニアのように年奉公人→黒人奴隷の労働にもとづくプランテーション経済が成立した¹¹⁾。

マイニッヒは、北アメリカの“a Protestant Commercial America”に対し、南米を“a Catholic Imperial America”と呼び、スペイン植民地をイギリス植民地と異なるタイプの植民地として捉えている¹²⁾。(二つの独自のヨーロッパ文明の分枝)彼はアメリカ大陸の植民地を五つの類型に分けている¹³⁾。

- ① 人種的階層化社会(北部メキシコ)
- ② 二人種社会(ヴァージニア, ブラジル)
- ③ 複合的社会(サウス・カロライナ, ジョージア)
- ④ 同質的社会(ニューイングランド, カナダ)
- ⑤ 多人種的社会(ペンシルヴェニア)

残念ながらマイニッヒは、スペイン植民地については、詳しく論じていない。ただスペイン植民地(帝国)は、都市志向型の社会であった点を強調している。スペイン植民地では、スペインの都市プランにもとづき植民都市が建設され、周辺地域を支配する「都市網」(a network of towns)が成立した。スペイン帝国は本質的に都市の集合体であった¹⁴⁾。このように、スペイン植民地は、イギリス植民地と違って、征服と植民の拠点としてのスペイン人の植民都市の建設により特徴づけられる。

(3) バプティスタの南・北アメリカ論

バプティスタは、『ラテン・アメリカ人と北アメリカ人—二つの文化の五百年—』(1987)において、両地域の文化の相違を多面的に論じている。

まず、両地域の先住民への態度の違いからみよう。北アメリカ(アメリカ合衆国)では、先住民人口が少なく、孤立した原始的文明(狩猟・採取)の段階にあったため、彼らを労働力としても利用できず、交易も成立しなかった。白人は西漸運動にとり先住民が邪魔となったため、絶滅政策をとった。かくて北米では、弾丸と聖書により先住民を制圧し、生き残りは、居留地へ囲い込まれた¹⁾。

ラテン・アメリカでは、先住民人口が多く、より高い文明の段階に達し、政治制度も整備されていた。スペイン人は、彼らの宗教を改宗させたが、

その制度は温存、利用する政策をとった。また先住民を労働力として利用し、酷使した²⁾。

ラテン・アメリカの独立運動の指導者ボリーバルは、独立後のラテン・アメリカ諸国の前途を悲観して、次のように述べている。ラテン・アメリカの人口は、スペイン人の下等な連中よりも無知なインディオや黒人から成っているの、こうした人々により代表され、支配される国は、『破壊する以外には道がない³⁾』と。またC・ランヘルも、ラテン・アメリカの欠陥として、国民的統合の欠如、対外的無能力、政治的不安定、人口増加率の高さをあげている⁴⁾。またO・パスによれば、北米が富裕となったのは、民主主義、資本主義、産業革命によるものであるのに対し、ラテン・アメリカの貧困は、反宗教改革、独占、封建制によるものである⁵⁾。

こうしたラテン・アメリカの貧困—低開発の原因を、先進国による富の搾取にありとする従属理論に対し、バプティスタは、その理論は人々を宿命論と従属国の自己麻痺に落ち入らせる逆効果となると批判している⁶⁾。

次に彼は、両アメリカの文化的遺産の代表者として、次の人々を対比している⁷⁾。

ラテン・アメリカ	アメリカ合衆国
聖アウグスチヌス	ルター
トーマス・アキーナス	カルヴァン
イグナチウス・ロヨラ	ロック
マキャヴェリ	フランクリン
ボリーバル	ジェファークソン(又はワシントン)

また南・北アメリカの社会形成に少なからぬ影響を与えた宗教について、バプティスタは次のように述べている⁸⁾。

ラテン・アメリカでは、スペインのカトリック教の布教が行われた。当時のスペインは、プロテスタンティズムに対抗するための反宗教改革の拠点となり、異端審問所の設立にみられるように、カトリック教の純粋さを守るために厳しい宗教的弾圧=改宗政策を実施していたが、この政策はそ

のまま新大陸に持ち込まれた。これに対し、北アメリカでは、プロテスタンティズムが支配的となり、選良のしるしとしての労働と物質的成功が生活の目標となった。そこでは、合理性、節約、誠実が美德とされ、個人の物質的利益の追求が当然視された。

ラテン・アメリカの植民地社会の形成において、次の点が重要である。スペイン社会の旧くからの階層制と専制政治が植民地に移植されたため、地方自治制は育たず(カビルドの弱体化)、官職売買などにより政治家の汚職が一般的となった。多数の先住民の存在とその労働力の利用(強制労働)により、豊富な鉱物資源を開発したが、その富は貴族階級を支えるのに使われた⁹⁾。

北アメリカでは、イギリスのマグナ・カルタ以来の市民権尊重の伝統が継承され、地方自治を発達させた。そこでは、労働力として利用できる先住民人口が少なく、鉱物資源も乏しかったため、移民自身の自己労働と黒人奴隷の輸入に頼らざるをえなかった。北アメリカでは、家族労働による自営農場が一般化し、血統や身分によるのではなく、自己労働による富の蓄積がその人の能力を計る尺度となった。植民地時代からその家族労働による個人的土地所有が、やがて西漸運動によるホームステッド法に連続していった¹⁰⁾。

要するに、ラテン・アメリカでは、中央集権的専制政治、カトリック教の絶対的支配、厳格な階層制が成立したのに対して、アメリカ合衆国では、代議制的民主政治、プロテスタンティズムと宗教的多元主義、流動的な階層が一般化したと言いうる¹¹⁾。

(4) バーネッカ他の経済発展の比較論

バーネッカとトブラー共編の『アメリカにおける開発と低開発—南・北アメリカの経済成長のコントラスト、歴史的考察—』(1993年)は、南・北アメリカの経済発展の相違を歴史的に比較して論じた本格的な著作である。編者は、「アメリカの南・北は、近代の開発ギャップのすべての特徴を特に鋭く示している。それ故、今日のリオ・グ

ランデ河の南・北の多様な相違を説明するため、対照的な両アメリカの歴史を研究する意義は大きい¹⁾。」と述べている。編者によれば、これまでこうした南・北アメリカの比較研究は稀にしか試みられなかった。何故なら、研究者たちがそれぞれの専門領域から出ようとしなかったこと、及びこうした比較をなす知識をもつ学者が少なかったことによるものである。

この問題について、ある学派（従属学派）は、ラテン・アメリカの低開発をもっぱら植民地領有国への長期にわたる依存＝従属に求めているが、北アメリカの例は、低開発の原因がすべて植民地の過去にあるのではないことを示している。南・北アメリカの相違の原因は、植民地とか従属といった限られた概念では十分に認識することはできず、より精密な歴史的研究が必要とされるのである²⁾。

編者は、南・北アメリカの比較研究のレベルを次の四点にまとめている³⁾。

① 政治体制

スペインの植民者は、王室の中央集権的権力の支配を強く受けていたのに対し、イギリス植民地では、中産階級（農民、手工業者、商人など）を代表する政治制度（植民地議会）が成立し、被支配階級の同意を必要とする自治制度が存在していた。

② 社会構造

移民（及び植民者）の男女間バランスが、スペイン植民地では著しく偏っていたのに対し、イギリス植民地ではほぼ均衡していた。また南米では先住民人口が多く、スペイン人はその労働力に大きく依存していた。こうしたことから、南米では人種混交が広くみられたのに対し、北米では、組織的な人種隔離政策がとられた。

③ 経済構造

北米では最初から一人当り所得が高く、経済成長の重要な前提条件をなしていた。経済構造の相違は、土地所有＝土地政策の南・北の差異に現れている。

南米では、隷属的な先住民労働に依存する

ラテン・アメリカ独自の大地所有制（アシエンダ）を生み出した。南米のエリートは、北米のような土地の均等分配の要求をあまり受けなかった。それ故、南米では土地所有の極端な不平等と多数の隷属的労働者階級（ペオン）をもつきびしい階層制的社会が成立し、それが経済構造を規定した。

これに対し、北米では土地政策が基本的に異っていた。ここではフロンティア（開拓者精神）が重要である。ターナーは、フロンティアがアメリカ社会に及ぼした民主主義的效果を強調し、フロンティアへの植民、土地開発のダイナミックな進展が、強力な個人主義と社会的平等と自助の精神を育成したと述べている。

ニューイングランドや北西部の家族農場に基礎をおく農業の優勢が、国家の全般的発展に大きく貢献した「独立自営農民層」（a class of independent farmers）を生み出した。そして、その基礎の上で多様化し、益々工業化に進むアメリカ経済が発展したのである。これは、地方市場と輸出市場向のアシエンダに基礎をおくラテン・アメリカ農業と非常に異った道であった。

④ 制度的要因

最近の研究は、南・北アメリカの異った道を説明するのに、経済的、社会的要因だけでは不十分だとして、制度的要因（地理的相違、天然資源の有無、生産要素の相違、植民地政策の相違、政治＝法制的及び文化的要因）が益々注目されるようになった。例えば、ラテン・アメリカの経済的停滞の原因として、スペインの前近代的制度と植民地体制が生産活動に及ぼした悪影響や市民的権利（法の前の平等、財産所有権、裁判制度など）の欠如の影響を考慮する見方である。

北米の工業化が北東部で開始された要因として、資本と労働力の豊富さと土地不足を、ラテン・アメリカでは逆に土地の豊富さと資本や熟練労働力の不足をみる見方もある。ま

た新大陸植民地の「人的資本」(human capital)の性質の相違に着目する見解がある。すなわち、北米の成功は、イギリスの文化的遺産の継承とその後のヨーロッパ移民の長期の流入が、長期的経済成長をもたらしたことによる。他方、ラテン・アメリカの独立戦争の破壊的結果が、十九世紀中頃まで政治的混乱をもたらした、経済成長と市場の統合を妨げたというのである。

以上が編者による南・北アメリカの比較レベルについての解説であるが、次に本書の内容にはいろう。本書は、次の五章から構成されている。

I. 長期的観点からの経済問題と開発

II. 19・20世紀における経済的發展に対する植民地の遺産の影響

III. 国際的経済関係とその経済、国家、社会への影響

IV. 農業構造と経済發展

V. 工業化：南・北アメリカの対照的パターン

この五章の中に各々論文(計十論文)が収録されているが、その中で重要と思われる論文の内容を紹介するにとどめたい。

a) コーツワース「ラテン・アメリカとアメリカ合衆国の比較経済史に関するノート」

コーツワースは、ラテン・アメリカの低開発の原因を、中枢による周辺の搾取という対外的経済関係に求める従属学派に批判的である。例えば、アルゼンチンのように先進ヨーロッパの経済に最も統合された国が、ラテン・アメリカで最も高い所得をもつ国となったことは、対外経済関係が経済成長を必ずしも阻害しなかったことを示している⁴⁾。

彼によれば、ラテン・アメリカでブルジョワ的諸制度(人権、私有財産制、法制度など)の採用が遅れたことが、その低開発をもたらした原因であると言うのである。ラテン・アメリカでこうした「制度的近代化」が生じなかったのは、①植民地体制が安定していて、特権階級の保護、人種的階級制度、原住民共同体の保護が実施されたこと、②変化を求め

る運動に対応して、王室が通商の自由化や課税の緩和などの改革を行って、制度の変革を防止したこと、によるものである⁵⁾。

ラテン・アメリカとは全く対照的に、北米の北・中部の定住型植民地では、イギリスからの相対的に高い所得の移民の流入と労働に対する土地の多さや相対的に高い生産性により、効率的経済制度が成立した。また植民地の輸出産物の交易条件の有利さや流通経費の減少により、植民地の人々の所得の増加が生じた。租税もスペイン植民地に比べて低かったし、慣習法が役人の恣意を制限して、資本と労働力の移動を保証したことも、この植民地の経済成長を促進した⁶⁾。

独立後もラテン・アメリカでは、旧帝国の遺産(カースト制度、独占、特権、租税制など)が引き継がれ、十九世紀になってやっと古い制度が廃止された。原住民共同体の土地共有制の廃止により、労働力と土地の移動が生ずることとなった。しかし、経済成長を促進する資本は、主としてヨーロッパやアメリカ合衆国から供給された。富と所得の分配の不平等は、根強く存続しラテン・アメリカの特質となった。このことは、一部は植民地時代の遺産の継承によるものであったが、大部分は、ラテン・アメリカの輸出主導的成長と外部の安い資本・技術の採用による結果であった。ラテン・アメリカの対外的経済関係は、経済成長を妨げなかったが、極端な富と所得の集中(大土地所有制の発展など)を促進したとすることができる⁷⁾。

b) ガルシア「植民地両アメリカの経済成長と経済停滞」

ガルシアによれば、南・北アメリカの経済力の格差は、植民地時代に生じ、十九世紀後半に広がったと言う。植民地時代の南・北アメリカは、①西インドとアメリカ南部のプランテーション経済の地域、②中部植民地、③ニューイングランド、④スペイン領アメリカの二つの中核地域(メキシコとペルー)に分

けられる⁸⁾。その上でガルシアは、北アメリカの植民地間の比較、スペイン領アメリカの二つの中核地域の比較、北米とスペイン領アメリカの比較を行っている。

北米植民地では、西インドや南部植民地の一人当りの所得は、他植民地に比べて高いが、所得の不平等分配が著しい。メキシコは、ペルーよりも一人当たり所得は高いが、所得分配はより不平等である。

植民地時代末のニューイングランドの一人当たり所得（北米では最低）は、メキシコの約2倍となっている。北米植民地では、先住民の人口減に関係なく、人口増加率が高かった（年平均3%）が、それを支える生産力も増大していった。メキシコやペルーでは、十八世紀までは先住民人口の増減が人口動向を規定した。北米植民地では、年平均0.5%の経済成長率が維持され、生活水準が上昇していったが、南米では、人口激減による生活水準の上昇は、疫病や強制労働などにより相殺された⁹⁾。

次にガルシアは、南・北アメリカの経済の比較のためのいくつかのモデルを使って両者を検討している。

生産要素モデル¹⁰⁾

北米は最初から土地＝人口割合が有利であったため、労働報酬が高くなり、移民の誘因となった。またフロンティアの存在が、人口増加にもかかわらず、そうした条件を持続させた。南米は最初から人口密度が高く、一人当りの労働の生産性は低かった上、“open frontier”が欠如したため土地の供給が制限され、生活水準が引き下げられた。ここでは「純粹のマルサス主義」が作用したのに対し、北米では「マルサス的フロンティア・タイプ」となった。

貿易＝市場モデル¹¹⁾

このモデルの中の一つであるスティブル理論によれば、経済成長は輸出部門の成功と輸出産業の技術水準により規定されると言う。

国内市場が狭隘で社会的分業が限られている国では、経済成長への唯一の道は、拡大する国際活動との結合にある。この理論は、西インドやアメリカ南部のような「プランテーション型経済」が、ニューイングランドのような「家族農場型経済」よりも一人当たり所得が高かったこと、北米が南米よりも生活水準が高かったことの理由を説明している。

社会制度モデル¹²⁾

北米では、人口密度が低く、「西漸運動」により“open frontier society”となったのに対し、南米では「西漸運動」の動きはなかった。北米では、インディアンの土地所有権が否定されたが、南米ではその共同体的土地私有権が保護された。また南米でもメキシコよりもアンデス地域の方が、共同体的土地所有が生き残った。このように、北米が“open frontier society”となったのに対し、南米では“no frontier society”となった。先住民の性質、先住民＝白人関係、先住民の土地所有権への態度が、南・北の社会の相違を生み出す要因の一つとなった。北米では、フロンティアの存在、先住民の追放が、生活条件の低下なしに人口増を可能にしたのに対し、南米では先住民は追放されず、疫病や酷使で激減したが、生き残った。ここではフロンティアが欠如したため、生活条件が低下し、富の両極分解で進行した。

c) ホルトフェリッヒ「1860年までのアメリカ合衆国の国際経済関係とその経済、国家、社会への影響」

南北戦争までに合衆国は、自立的経済成長への離陸段階に達していた。独立革命は、イギリス重商主義政策を廃止したが、まだ自給的な農村が合衆国の大半を占め、国内市場も狭かった。初代財務長官ハミルトンなどによりアメリカ工業育成政策が提唱されたが、独立後ヨーロッパ向けの農産物輸出が激増し、貿易、海運業が繁栄し、商業資本の蓄積が進んだ。そして第二次米英戦争中に、この商業

資本の工業への投資が進み、ニューイングランドの木綿工業が発展した¹³⁾。

1815～1860年期は大西洋経済の形成期で、アメリカは自立的経済 (self-sustained economy) への方向、すなわち、ヨーロッパ依存の経済から自国経済の自立の方向に向かっていった。工業化は、十九世紀初にニューイングランドで開始され、やがて中部大西洋諸州に拡がり、北東部の資本は繊維工業などに投資された。アングロ・サクソンの背景とイギリスとの商業的結合が北東部の企業家を養成したのである。経済成長には、労働倫理と一定の教育水準が必要であり、ニューイングランドのピューリタンの伝統が、訓練された労働力を生み出すのに貢献した¹⁴⁾。他方、ラテン・アメリカでは、カトリック的背景のため、こうした工業化に必要な労働力の陶冶がなされなかった。

ホルトフェリッヒによれば、ラテン・アメリカがアメリカ合衆国のような経済的發展を達成しなかったのは、次のような欠陥による。ラテン・アメリカでは、スペイン・ポルトガルの伝統と抑圧政策のため、政治的、経済的自治が欠如し、所得・富の不平等分配のため、大衆的経済市場が発達せず、工業化の刺激が乏しかった上、企業家能力、労働訓練、教育のある「人的資本」を欠如していたことにある¹⁵⁾。

d) クラーク「十九世紀北米における農村社会と経済的發展」

南・北アメリカの経済的發展の差は、十九世紀に生じたといわれるが (コーツワース)、その答えの重要な部分、両者の十九世紀の農業構造の相違にあると思われる。アメリカの急速な経済發展で重要な役割を演じたのは、ニューイングランド (ついで北東部) であった。アメリカの南部は、世界市場向けの農産物を生産し、所得を増加させたが、その所得は貿易・海運業・工業製品の購入や土地と奴隷の購入に向けられた。南部経済は「成長」

したが、「発展」しなかったというジェノヴィーズの見解は正しい。南部の運命は、ステイブル輸出と奴隷労働への二重の依存の結果であった¹⁶⁾。

北東部の「家族労働による自由土地所有の農業」の存在こそが、北米の長期の経済發展を可能にした基礎であった。十八世紀のニューイングランドは、決して自給自足的ではなく、局地的商品交換の複雑なネットワークを構成し、小規模工業を育てて、経済変革の強力な地盤を創出していった。独立後の西部への移住の流れの後にニューイングランドに残った人々は、農業と結合しつつ農村内に商・工業を發展させた。その結果、農村内にかなりの数の小規模工業と婦人・子供からなる労働力が創出された。北米では経済發展は、南部のように大規模なプランテーション農場からではなく、ニューイングランドの家族農場から生じたのである¹⁷⁾。こうした北部の農村社会の構造とそのイデオロギーが、産業資本主義を養成したと言いうる。南北戦争は、「小・中規模農場の北部モデル」を一般化し、北米全体の経済的変化をよびおこしたのである¹⁸⁾。

e) コ克蘭「合衆国の工業化の根源」

コ克蘭によれば、合衆国の工業化の主因は、技術改革それ自体よりも、十八世紀以来の文化的、制度的要因に求められるべきである¹⁹⁾と。実用的且つ有用なものに対する強い関心は、アメリカ文化の特徴であり、それは特に経済界と法との関係に現れている。アメリカの土地法は、土地改良や土地移転に便利であり、会社設立や契約の法は、国家の介入を排除して、投資を促進する効果があった。合衆国におけるよく調整された柔軟な^{ビジネスシステム}実業制度が急速な経済發展の基本的前提条件となった²⁰⁾。また新しい技術を容易に受け入れる傾向もアメリカ文化の特色であった。西部へのたえ間のない移住は、社会の開放的階級構造をつくり出した。地理的及び社会的

な流動性の高さが、土地や家族的結合よりも貨幣又は「経済的合理性」という社会共通の尺度を強化していった²¹⁾。

(5) デーリーの南・北アメリカ人間類型論

デーリーの『ラテン・アメリカ人—その精神とエートス』(1992年)は、ラテン・アメリカ人を歴史的・文化的背景の中で北米人と比較しながらその特色をえぐり出した著作である。彼は、V・モークが『バンディランテスとパイオニア』(1964年)でアメリカ合衆国を解明にするためにブラジルと対比したのとは逆に、ラテン・アメリカを理解するために合衆国を説明する方法をとったと述べている¹⁾。

デーリーは、まずラテン・アメリカと合衆国の文化的相違をずばり対比して、「公人文化」(“public man culture”, Home politician)対「私人文化」(private man culture)又は「カトリック的人間」(“Catholic man”)対「プロテスタント的人間」(“Protestant man”)と呼んでいる²⁾。それでは、こうした人間類型の相違は、いかなる形で現れているのか。

ラテン・アメリカの「二重道徳」

ラテン・アメリカの道徳は、「二重道徳」(double moral standard)であるのに対し、合衆国のそれは、「単一道徳」(a single moral code)である。また家族形態では、前者が「拡大家族」(extended family)を特徴とする³⁾。ラテン・アメリカの家族は、愛情と兄弟愛により堅く結ばれ、他人(非血縁者)の侵入を遮断する働きをしている。

ボリーバルによれば、宗教は家庭内の人間を支配するが、法は家庭外を規制すると言う。ラテン・アメリカでは、倫理は公・私に分離し、二重化している⁴⁾。カトリック教も、一つの規範は、家族や仲間に、他の規範は、家族外の生活に適用されるという二重性(dualism)を含んでいると言われる。つまり、カトリック教徒は、二元的生活の選択があるが、プロテスタントには、一元的生活しかありえないのである。「単一道徳的資本主

義」⁵⁾ マフィアもこうしたカトリック教の道徳の二分法に救いを見出している。彼らは「良き父、良き夫、良き子供」であり、友を裏切らず、教会に多額の金を寄進する熱心な教会員なのである⁵⁾。

ところでラテン・アメリカの道徳の二重性はどこから生じたのであろうか。

ニューイングランドのピルグリムたちは、聖者になるため道徳の二重性を不誠実として拒否し、道徳の一元性を貫いたが、ラテン・アメリカでは、植民の当初から「二重道徳の精神」が広く受け入れられた。スペイン人は、アメリカの征服を「神の栄光のため」の行為として正当化し、征服はルネッサンス資本主義と同様に二元的であった⁶⁾。

トーマス・アキーナスは、アウグスチヌスとアリストテレスを統合して、現世の行為の新しい基準をつくった。それは、『精神の王国は地上の王国と区別すべきである』という基準である。アキーナスは教会にサクラメントの独占権を与え、天国への門の特権を許した⁷⁾。(教会の制度化)

こうしてカトリック教は、私的道德と公的生活の事実上の分離への道を開いた。ラテン・アメリカでは、日常的道徳は重要性を失い、ミサへの出席が義務化された。この道徳の二重性がラテン・アメリカ的環境にとり基本的となったことは、丁度ヒンズーのカースト的環境にとり、階層制が重要となったのと同様である⁸⁾。

「政治的人間」(Home Politicus)

北米人は、「経済的成功の倫理」により動かされる人々である。人生は個人のイニシアティブと選択の因果的連鎖とみなされ、“self-made man”の自発的行為により富が蓄積される。金もうけは、人生のゴールであり、個人はその蓄積の程度に応じて評価される。そして労働は金もうけの方法として積極的に評価される⁹⁾。ピルグリム(宗教的=農民的定住者)は、土地の耕作・収穫に関心をもち、土地所有と自然の征服に努力した。ハンチントンによれば、『アメリカ人は、彼らの行為を正当化するために「富の福音(gospel of wealth)」を考案した。大きな富、大きな努力、大きな長所、大きな危険……への報酬である。…逆にアメリカ

人は、権力の大きな不平等を正当化しなかった。こうしてアメリカ人は、富の福音をもつことになったが、当然のことながら、「権力の福音」(gospel of power)を決してもたなかったし、もつことができない¹⁰⁾。」

これに対し、征服者(軍事的=政治的滞在者)は、先住民の再編を行い、人間による人間の搾取(先住民の奴隷化)に関心をもった。彼らは、ムーア人への七百年にわたる戦争から、人間の価値は他人に対する権力=支配権により計られることを学んだ。その結果、北米人が先住民の土地を収奪し、彼らを排除したのに対し、スペイン植民者は、先住民を植民地の社会的階層制に編入し、農業の労働力や家内労働力として使用した¹¹⁾。ラテン・アメリカでは、「富の福音」は通用せず、カトリック教のもつ「権力の福音」がひろまった。トーマス・アキーナスによれば、人間の物質的利得への渴望は、人間の「卑劣さ」の現れであった¹²⁾。

「カウディージョ文化」(caudillaje culture)

カウディージョ(caudillo)とは、ラテン・アメリカの政治的(軍事的)ボス(頭領)を指すが、ディーリーは、ラテン・アメリカ文化の特徴を「カウディージョ文化又は社会」と呼んでいる。「カウディージョ文化」の特質は、北米人にみられる市場の物的取引関係と異る、「人的仲介」(personalistic intermediary)を重視する文化である。ラテン・アメリカ人は、来世への仲介者として聖人を置くのと同様に、現世の目的のために良き友人(buen amigo)を頼りとするのである¹³⁾。「カウディージョ社会」では、北米人における信用状(個人関係をこえた客観的なもの)に当たるものとして紹介状が重要となる。北米人は、複雑な人間関係よりも「顔のない市場」(faceless market place)又は「貨幣関係」(cash nexus)で物事を処理する。ラテン・アメリカ人の「温情」(geniality)の習慣に対し、北米人は「自由放任のエートス」をもっている。『友人が多ければ多いほど、その人の影響力が大きくなる』(ピッツ=リバーズ)と言われるように、友人関係は威信と結びついている。子分(部下)をもつことは、力

なのである¹⁴⁾。ラテン・アメリカ人は、かくして「取り巻き」を好む。古代ローマの「親分子分関係」(clientela)が、近代ラテン・アメリカの人間関係を特徴づけている。「取り巻き」の顔が、彼の相対的な優越を示すものとなる。「カウディージョ精神」は「権力」に向うが、資本主義の精神は「富」に向かうのである¹⁵⁾。北アメリカの資本主義的見方とラテン・アメリカのカウディージョの見方の基本的相違点は、前者の究極的目標が“to do”であるに対し、後者のそれは“to be”であることである¹⁶⁾。

「威厳」(dignidad)

カトリックの「威厳」(dignidad)に対応するのは、プロテスタントのグノーシス主義であり、それは外面的プライド対内面的自己正当化として捉えられる。「威厳」は地位(rank)と同意語である¹⁷⁾。フランクリンの“credit is money”に対し、カウディージョは“dignity is followership”と言う。銀行による信用は、経済的發展を約束するが、威厳は「取り巻き」の流れを保証するのである。貨幣と追従者精神は、アングロ・アメリカとラテン・アメリカ文化の本質を示し、信用と威厳は、各々のエートスを刻印している¹⁸⁾。ラテン・アメリカの学校教育は、「政治的人間」に有用な技術や、いかにして威厳を高めるかを教えている。生徒は、キケロ、スコラ哲学者、マキャベリなどの教えを学び、「よき教育を受けた人々」(gente bien educada)となるように努める¹⁹⁾。

カウディージョ文化は、商売を政治的モデルの上に組み立てるのに対し、資本主義文化は、経済的基準の上で政治的行動をきめようと努める。またプロテスタントにとり、社交による時間の浪費は、怠惰なお喋りにすぎず、“time is money”に反する。ラテン・アメリカ人は、逆に“time is friendship”であり、社交性は彼の力の源泉である。スペイン文化では、^{レジャー}閑暇は人を気高くするが、労働、特に肉体労働は品位を落とすことになる²⁰⁾。

資本主義的生産の倫理が“Early to bed, early to rise”, カウディージョのエートスは、“Late

to bed, late to rise” 哲学である。ブラジルの諺は言う。『レジャーは仕事よりも良い』と。シャピロも「南米人にとり、ビジネスはそれ自体目的ではなく、生活を楽しむために金を得る一つの方法にすぎない。」と述べている²¹⁾。

スペイン人は、植民地の征服時代から、先住民から婦人と金を手に入れ、先住民を隷属させ、キリスト教化することにより「男」であることを示した²²⁾。ラテン語では、政治的及び性的能力を同じ語源 (potentia) から引き出しており、“virtue” は “virility” (精力) を意味している。「男らしさ」 (manliness) は、長期的な性的並びに政治的エネルギーを含意している。ラテン・アメリカの “machismo” (男尊女卑) は性的能力及び自己主張の気質を含んでいる。ラテン・アメリカでは政治的支配と女性支配は相互に関連しているのである²³⁾。

「家 族」

家族は、ラテン・アメリカでの成功の第一の手段である。血縁関係と代父制 (compadre system) は、人々にとってインフラストラクチャーとなっている²⁴⁾。

プロテスタント的産業社会では、宗教的及び経済的救済は、ともに仲介者なしの世界を前提としており、各人は自分で物事を行わねばならず、縁者びいきが通用しないだけでなく、不道德とみなされる。(selfmade man の哲学) ところが、ラテン・アメリカでは、血縁的結合こそが最も信頼できる絆であるとされる。「家族的えこひいき」(ネポティズム) は、合衆国のように非難されるどころか、親族や友人の相互扶助として当然に受け入れられる²⁵⁾。

「都 市」

アリストテレスは、人間にとり不可欠の社交性と友愛は都市に住むことによつてのみ可能であると述べているが、こうした都市 (civitas) の思想はローマに継承され、更にラテン・アメリカに征服者により伝えられた。コロンブスは、都市と文明を等置し、都市生活を男らしさ、衣裳、マナーと結びつけた。ラテン・アメリカでは、都市は文

明、農村は野蛮という考え方が一般化していった。「大都市は、疑いもなく高度文化の必然的な組織体である」とエンリケ・ロドは述べている²⁶⁾。

合衆国では、ソーロー、エマーソン、ホイットマンなどにより、田園的生活が賛美された。資本主義的規範が合衆国の貧民をより輝かしい未来を求めてホームステッド的西部へ駆りたてたのに対し、カウディージョ的価値観がラテン・アメリカの貧しい人々を大都市生活へ追いやっている²⁷⁾。

ラテン・アメリカ人と北米人の人間観は対照的である。ラテン・アメリカ人は、北米人が非合理的に時間、貨幣、仕事、物質の対象に没頭しているのに対し、北米人はラテン・アメリカ人が非合理的に権力や虚栄を求めながら、呑気にレジャーと友人にうつつを抜かしていると考える²⁸⁾。合衆国とラテン・アメリカのエートスの基本的要素は、労働のエートス (work ethos) とレジャー・エートス (leisure ethos) と言うことができる²⁹⁾。

カウディージョ社会は、キリスト教と十三世紀のトーマス・アキナスの古典的文化の融合から生じている。西欧のリベラリズムは、そうした総合に対するホッブスのプロテスタント的拒否に起源をもっている。ラテン・アメリカと合衆国の行動合理性は、それぞれアリストテレス＝アキナスとホッブスの人間性についての見解に従っている。アリストテレスによれば、人間の社交性の純粋な表現は友情 (friendship) であるが、ホッブスによれば、逆に人間は社会に適さず、絶えず競争し、契約 (covenant) にしばられなければ、交際をさけるものである。もしアリストテレスの自然主義的前提に立てば、ラテン・アメリカの拡大家族、友情の礼賛、取り巻き人間、公人、政治的人間、家柄にみられる人間関係に重点が置かれることになる。またホッブスの前提に立てば、所有欲の強い個人主義 (possessive individualism)、きびしい個人主義、^{セルフメイドマン} 独立独行人、自己利害、利害による政治、のような人間の自己中心主義 (反社会的性格) から生ずる孤立した「私－文明」 (“me” civilization) に到達することになる³⁰⁾。

ホッブスが望んだように、契約や憲法が現在の

合衆国を支配し、それが経済的、政治的安定をもたらしている。しかし、その巨大な功績にもかかわらず、合衆国の「契約志向的モデル」(covenant-oriented model)は欠陥をもっている。言論のわざとらしさ、行為よりも態度の重視、規則への偏向、契約重視は、危険なラテン・アメリカ的ワンマン支配ではないが、「非人間的顔のない支配」(faceless rule of "no man")、管理国家的支配に固有の欠点をもたらしている。他方、ラテン・アメリカでは、法の支配よりも人間の支配が全能的力をもっている³¹⁾。

Ⅲ 結 語

以上、最近の南・北アメリカの比較史的研究のいくつかを取り上げ、その内容を紹介してきた。筆者は前掲論文で南・北アメリカの比較史を概観し、両アメリカの相違の歴史的原因として、本国の文化・伝統の相違(特に移民＝植民者(主体)の人間類型の相違、新大陸での自然的社会的客観的条件の相違(特に先住民や黒人との人種関係や自然資源の存在)、植民の定住形態の相違(都市型と農村型)を指摘しておいた。こうした比較史上の問題点は、ここで紹介した比較史研究でも、重視されている。

マサ・サバーラは、新大陸のイギリス植民地とスペイン植民地を対比して、前者が私的利益を求めて来住した移民により本質的に経済的事業として先住民を排除しながら植民地が建設された(定住型植民地)のに対し、後者は王権の指導下で征服と宗教的・文化的拡大の事業として植民が開始された植民地であった。スペイン植民地では封建領主たんとする人々(征服者)が先住民の労働力を利用・搾取する搾取型植民地であり、人種の階層制を成立させた。このようにマサ・サバーラは、イギリス植民地とスペイン植民地を様々な角度から比較し、その特質を解明する植民地類型論を展開しているが、こうした見方は前掲論文で述べた植民地類型論と軌を一にし、これを補強するものであると言えよう。

マイニッヒの「新大西洋世界」という歴史的枠組での新大陸史のとらえ方は、新しい視点からの比較史の試みである。カラスたちも『コロンブスから奴隷制廃止までの大西洋アメリカ社会』¹⁾(1992年)において、コロンブのアメリカ航海以来ヨーロッパ史、アメリカ史、アフリカ史が不可分に結合し、各々の民族と文化が相互影響を受ける新しい世界である「大西洋世界」(The Atlantic World)が生じたので、これを研究枠組とすべしと提唱している。カラスの「大西洋世界」の時期区分は、次の如くである。

第一期移住期(1492年～17世紀中頃)

アメリカ先住民の破滅とヨーロッパ人及びアフリカ人による補充・代替期で、ブラジル、カリブ諸島、ヴァージニアにおけるプランテーション農業の開始期。

第二期成熟期(1650～1770年)

各種の政治＝行政制度の導入、成立期で移民の増加と、生産及び貿易の発展期。

第三期移行期(1770～1880年)

植民地体制からの離脱(独立)の時期。

このように「大西洋世界」の歴史観は、アメリカ大陸史を北米と南米に分離する見方を改め、ヨーロッパの「新大陸」への進出を新しい世界史の幕あけとして捉え、先住民、ヨーロッパ人、アフリカ人の三者による新しい世界の出現を強調している。マイニッヒのイギリス型、カナダ型、メキシコ型と呼ぶ新大陸の植民地類型が、先住民との関係による分類であることは、こうした立場を示すものであると言えよう。

バプティスタも、南・北アメリカの歴史を比較史的に検討し、両文化の相違の原因に、先住民の存在形態とそれへの対応の仕方、カトリックとプロテスタントの宗教の相違、政治的伝統(民主主義と中央集権の専制政治)の相違をあげている。

バーネッカたちの経済成長の南・北比較史論は、バプティスタと同様に従属理論に批判的立場をとり、比較のレベルを政治・法制・社会・経済など多面的角度からのアプローチを提唱している。

コーツワースは、ラテン・アメリカの低開発の

原因をブルジョワ的諸制度（人権や私有財産制など）の採用の遅れにありとし、ガルシアは、北米の“open frontier society” 対南米の“no frontier society” の相違の原因を、先住民の性質、土地所有権の差異などに求めている。

またホルトフェリッヒは、アメリカ経済の自立的成長への発展を支えた人的要因として、労働の倫理と訓練（教育）の重要性を強調している。クラークは、南・北アメリカの経済の発展の差は、十九世紀の両地域の農業構造の相違にありとし、アメリカの産業資本主義は南部の輸出向農産物の発展によってではなく、北東部の家族労働による自由土地所有農場の成長・発展により成立したと述べている。

ディーリーは、北米人が「プロテスタント的人間」（私人文化）であるに対し、南米人が「カトリック的人間」（公人文化又は政治的人間）であると規定し、人間類型論的視点から両文化の相違を論じている。ディーリーは、M. ウェーバーの共同体の内と外の倫理の二元性やエートス論を思わせるラテン・アメリカの人間類型論を詳細に展開している。

彼はラテン・アメリカの人間類型の特徴として、二重道徳（私的と公的又は家族内と外）、政治的人間類型（「権力の福音」）、カウディージョ文化（人的仲介、取りまき人間）、温情主義＝血縁主義などをあげている。

他方、北米人の特徴としてラテン・アメリカ人と対照的に、道徳の一元性、経済的成功の倫理（「富の福音」）、自由放任のエートス、内面的自己正当化をあげている。そしてこうした人間類型の思想史的系譜として、アリストテレス＝トーマス・アキナス的立場（家族・友情の重視、政治的人間、ワンマン支配）とホツプスの立場（個人主義、利害による政治、私＝文明、契約・法による支配）との対立であると指摘している。

以上のように、最近の南・北アメリカの比較史的研究は、新しい視点を加えて、多面的、実証的に深化しつつあると言えよう。

参 考 文 献

I

- 1) 拙稿「南・北アメリカの比較経済史的考察－イギリス植民地とスペイン植民地－」((一), (二), 広島大学「経済論叢」第12巻第3号, 第4号, 「アングロ・アメリカ植民地とラテン・アメリカ植民地の比較史」(「アメリカ研究」第26号)

II (1)

- 1) D.F.Maza Zavala, *Hispanoamérica-Angloamérica: causas y factores de su diferente evolución*, Madrid, 1992, pp. 159, 161.
- 2) *Ibid.*, p. 159
- 3) *Ibid.*, p. 161-163.
- 4) *Ibid.*, p. 118.
- 5) *Ibid.*, p. 14.
- 6) *Ibid.*, p. 126.
- 7) *Ibid.*, p. 144.
- 8) *Ibid.*, pp. 142-143.
- 9) *Ibid.*, p. 139.
- 10) *Ibid.*, pp. 144-146.
- 11) *Ibid.*, p. 25.
- 12) *Ibid.*, p. 58.
- 13) *Ibid.*, pp. 78-79.
- 14) *Ibid.*, pp. 79-80.
- 15) *Ibid.*, p. 96.
- 16) *Ibid.*, pp. 93-95.
- 17) *Ibid.*, p. 183.
- 18) *Ibid.*, p. 183.
- 19) *Ibid.*, pp. 169-170.
- 20) *Ibid.*, p. 171.
- 21) *Ibid.*, pp. 182-183.

(2)

- 1) D.W.Meinig, *The Shaping of America: A Geographical Perspective on 500 years of History*, vol. I. *Atlantic America, 1492-1800*, New Haven, 1986, p. 7.
- 2) *Ibid.*, pp. 65-66.
- 3) *Ibid.*, p. 65.
- 4) *Ibid.*, p. 79.
- 5) *Ibid.*, p. 72.
- 6) *Ibid.*, p. 29.
- 7) *Ibid.*, p. 38.
- 8) *Ibid.*, p. 63.

- 9) *Ibid.*, pp. 101-105.
 - 10) *Ibid.*, pp. 146-155.
 - 11) *Ibid.*, p. 164.
 - 12) *Ibid.*, p. 64.
 - 13) *Ibid.*, p. 223.
 - 14) *Ibid.*, pp. 9, 235.
- (3)
- 1) M. Baptista Gumucio, *Latinoamericanos y norteamericanos: cinco siglos de dos culturas*, Caracas, 1987, p. 15.
 - 2) *Ibid.*, p. 16.
 - 3) *Ibid.*, p. 17.
 - 4) *Ibid.*, p. 29.
 - 5) *Ibid.*, p. 39.
 - 6) *Ibid.*, p. 55.
 - 7) *Ibid.*, p. 65.
 - 8) *Ibid.*, pp. 44, 95.
 - 9) *Ibid.*, pp. 96-97.
 - 10) *Ibid.*, pp. 95-97.
 - 11) *Ibid.*, p. 101.
- (4)
- 1) W. L. Bernecker & H. W. Toblers eds., *Development and Under-development in America-Contrasts of Economic Growth in North and Latin America in Historical Perspective-*, N.Y., 1993, p. 1.
 - 2) *Ibid.*, pp. 1-2.
 - 3) *Ibid.*, pp. 2-4.
 - 4) *Ibid.*, pp. 15-17.
 - 5) *Ibid.*, pp. 17-18.
 - 6) *Ibid.*, p. 19.
 - 7) *Ibid.*, pp. 20-27.
 - 8) *Ibid.*, pp. 51-52.
 - 9) *Ibid.*, pp. 54-61.
 - 10) *Ibid.*, pp. 62-67.
 - 11) *Ibid.*, pp. 62-67.
 - 12) *Ibid.*, pp. 76-80.
 - 13) *Ibid.*, pp. 162, 170-175.
 - 14) *Ibid.*, pp. 180-186.
 - 15) *Ibid.*, pp. 188-189.
 - 16) *Ibid.*, pp. 194-199.
 - 17) *Ibid.*, pp. 198-199.
 - 18) *Ibid.*, pp. 202-203.
 - 19) *Ibid.*, p. 229.
- 20) *Ibid.*, pp. 237-238.
 - 21) *Ibid.*, pp. 238-240.
- (5)
- 1) G. C. Dealy, *The Latin Americans: Spirit and Ethic*, Boulder, 1992, p. ix.
 - 2) *Ibid.*, pp. xiv-xv.
 - 3) *Ibid.*, p. 11.
 - 4) *Ibid.*, p. 13.
 - 5) *Ibid.*, p. 12.
 - 6) *Ibid.*, pp. 22-23.
 - 7) *Ibid.*, pp. 23-25.
 - 8) *Ibid.*, p. 30.
 - 9) *Ibid.*, p. 55.
 - 10) S.P. Huntington, *American Politics: The Promise of Disharmony*, Cambridge, Mass, 1981, p. 35, in *Ibid.*, p. 63.
 - 11) *Ibid.*, p. 62.
 - 12) *Ibid.*, p. 63.
 - 13) *Ibid.*, p. 71. cf. H.M. Hamill ed., *Caudillos: Dictatorship in Spanish America*, Norman, 1992.
 - 14) *Ibid.*, p. 73.
 - 15) *Ibid.*, pp. 74-76.
 - 16) *Ibid.*, p. 99.
 - 17) *Ibid.*, p. 100.
 - 18) *Ibid.*, p. 101.
 - 19) *Ibid.*, p. 104.
 - 20) *Ibid.*, pp. 107-109.
 - 21) *Ibid.*, pp. 111-113.
 - 22) *Ibid.*, p. 137.
 - 23) *Ibid.*, pp. 138-139.
 - 24) *Ibid.*, p. 178.
 - 25) *Ibid.*, pp. 179-180.
 - 26) *Ibid.*, pp. 193-194.
 - 27) *Ibid.*, pp. 194-194.
 - 28) *Ibid.*, p. 209.
 - 29) *Ibid.*, p. 211.
 - 30) *Ibid.*, pp. 211-212.
 - 31) *Ibid.*, p. 113.
- III
- 1) A. L. Karras & J. R. McNeil eds., *Atlantic American Societies From Columbus through Abolition, 1492-1880*, London, 1992. pp. 1-10.